

# T-Navvi

これからの小学校教育を考える！ 情報マガジン  
[ティナービ・エデュ]



Vol. 11  
2022 February



巻頭言

## 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

上智大学教授  
(文部科学省教育課程部会委員)  
奈須 正裕



【特集】学校現場とSDGs

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



一般社団法人イマココラボと考える！  
**私たちのSDGsトリセツ**  
一般社団法人イマココラボ  
共同創業者／共同代表 稲村 健夫・村中 剛志



SDGs授業実践紹介！  
**理科／社会**  
宝仙学園小学校教諭 吉金 佳能  
横浜市立幸ヶ谷小学校教諭 宗像 北斗

道徳

【道徳】教えて！ 加藤先生・土田先生

## 道徳授業 誌上チェック & アドバイス

座談会 「指導と評価の一体化」に向けて

敬愛大学教授 市川 洋子  
摂南大学教職支援センター特任講師 谷口 雄一  
豊中市立島田小学校教諭 長岡 かの子

好評第3弾！ 【デジタルで道徳 第3回】  
富津市立富津小学校教諭 磯部 光泰

千葉大学教授  
土田 雄一



## 道徳

教えて！加藤先生  
教えて！土田先生

筑波大学附属  
小学校教諭  
加藤 宣行



保健  
体育

## デジ体座談会

～ボール運動領域を中心にICTの活用を考える～

日本体育大学教授 白旗 和也 日本女子体育大学准教授 須甲 理生  
東京学芸大学教授 鈴木 聡 川口市立原町小学校教諭 江口 竜太  
徳島市千松小学校教諭 三木 アカネ



## 生活習慣病予防指導の考え方

内科医／内分代謝科医 太田 充胤

## 光文書院発行の教育情報誌です。


今、必要な最新の教育情報を詳しくやさしくお伝えしていきます！

小学校現場で  
ご活躍されている  
先生方の  
力になります！

# CONTENTS

**巻頭言** 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実 » P.3~6

中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」で示された「個別最適な学び」と「協働的な学び」の理念と実現方法について、天童市立天童中部小学校の実例をもとにご示唆をいただきました。 奈須 正裕先生▶



**特集** 学校現場とSDGs » P.7~14

SDGsに関するワークショップなどを実施している一般社団法人イマココラボの稲村健夫さん・村中剛志さんと、SDGsをどのようにとらえ、関わるとよいのか考えました。

さらに、SDGsの学習に力を入れている2名の先生に理科/社会の授業での実践をご紹介いただきました。

**道徳** 教えて！加藤先生 土田先生 » P.15~20

道徳の評価について、「指導と評価の一体化」をテーマに3名の先生に鼎談いただきました。道徳授業の「誌上チェック&アドバイス」は加藤宣行先生にお答えいただいております。「デジタルで道徳」の第3弾も掲載です。

**保健体育** 【体育】デジ体座談会 ~ボール運動領域を中心に ICTの活用を考える~ » P.21~24

副読本『体育の学習』編集委員である白旗和也先生と、デジタル教材「デジ体」のボール運動領域の制作に関わってくださった2名の先生、さらに、実際に「デジ体」を使用している2名の先生に、ボール運動領域を中心にICTの活用についてお話しいただきました。

【保健】生活習慣病予防指導の考え方 » P.25~26




【巻末特集】採点支援システムEdLogを導入！ » P.27~29

グローバル人材の育成に力を入れる立命館小学校に聞く、その経緯と効果とは？

【光文書院からのお知らせ】  
光文書院のデジタルドリル「ドリルプラネット」実証研究実施！ » P.30~31

▶▶▶ 読者参加型情報誌を目指していきます

ご要望をお寄せください！

 <p>この二人の対談記事を読みたいですね！</p> <p>▼</p> <p>弊社がコーディネートして、対談企画を実現していきます。</p>	 <p>特別支援教育を特集してほしいな。</p> <p>▼</p> <p>弊社がご要望のあったトピックを取材して、誌面でお伝えします。</p>
 <p>私の道徳実践を達人先生に助言してほしい！</p> <p>▼</p> <p>道徳指導や実践経験の豊富な先生に、本誌上で助言をいただけます。</p>	<p>お問い合わせフォームはこちらです！</p>  <p>取り上げてほしい情報やご意見を、弊社 Web サイトを通してお寄せください。</p>



役立つ！  
情報満載

**T-Navi Edu** (ティナーナビ・エデュ) Vol.11

発行 2022年2月  
編者 小学校若手教員サポート研究会  
著作兼 発行所 株式会社光文書院  
長谷川 知彦

〒102-0076 東京都千代田区五番町14  
TEL 03-3262-3271(代)  
URL <https://www.kobun.co.jp/>  
印刷・製本 三松堂株式会社

◇表紙・本文デザイン：Tokyo A  
◇本文イラスト：熊アート

**巻頭言**

# 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

すべての子どもは生まれながらにして有能な学び手です。「教師が教えなければ子どもは学ばないし、学ぶことができない」という誤った思い込みを払拭することが、今まさに求められているのです。



上智大学教授  
(文部科学省教育課程部会委員)  
奈須 正裕

「令和の日本型学校教育」が目指すもの

中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」は、従来の「日本型学校教育」について「経済発展を支えるために、『みんなと同じことができる』『言われたことを言われたとおりにできる』上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、『正解(知識)の暗記』の比重が大きくなり、『自ら課題を見つけ、それを解決する力』を育成するため、他者と協働し、自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないか」(答申、p8)としています。

また、コロナ禍に伴う「学校の臨時休業中、子供たちは、学校や教師からの指示・発信がないと、『何

をして良いか分からず』学びを止めてしまうという実態が見られたことから、これまでの学校教育では、自立した学習者を十分育てられていなかったのではないかという指摘もある」(答申、p13)とも述べています。

このような状況を改善すべく、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るのが「令和の日本型学校教育」における重要な課題です。では、それは一校のカリキュラムの中で、たとえばどのような姿として実現可能なのでしょうか。今回は、山形県天童市立天童中部小学校の取り組みを例に考えていきたいと思います。



### 子どもたちが進める授業

天童中部小学校では通常の授業に加え、教科学習に関しては「自学・自習」と「マイプラン学習」という、子どもが自立的に学ぶ2種類の学習に取り組んできました。

資料1は、6年生算数科における、分数のかけ算の単元での「自学・自習」の様子です。黒板の前に教師の姿はありません。右側でタブレットを手に立っている女の子が今日の先生役で、左側では二人の子どもが仲間の意見を板書にまとめています。そう、「自学・自習」とは、子どもたちが進める授業なのです。

興味深いのは、通常の授業よりもよく手が挙がり、活発な議論がなされることでしょう（資料2）。教師の発問には意図があり、高学年ともなると、それを子どもはどうしても気にしてしまいます。子ども同士だとそんな先生に対する忖度や遠慮がないので、本音でぶつかり合い白熱した話し合いになりやすいこともわかってきました。

「なぜこんなことができるのか」「何か特別な訓練をしているのではないか」とよく聞かれますが、子どもたちは入学以来、先生による授業を膨大な時間経験し、先生がしていることを毎日よく見えています。そ

れを上手に真似っこしているのです。機会さえ作ってあげれば、子どもたちは大喜びで「自学・自習」という名の先生ごっこに真剣に取り組むでしょう。

とりわけ、先生役の子どもは真剣そのもので、事前の準備もしっかりやってきます。仲間たちも精一杯協力してよい授業にしようとするから、活気のある濃密な時間になるのは当然のことなのです。

本来、授業を含め学校生活はすべて、子どもと教師が協働で創り出していくものでしょう。学校行事や児童会活動については、これまでも子どもが主体となり、創意工夫を発揮することが多かったのですが、こと授業となるとすべてを教師が仕切ってきました。「自学・自習」はこの壁を打ち破り、授業もまた、子どもたちと教師と一緒に創っていくものとしたのです。

### 単元まるごとを自分の計画で学ぶ

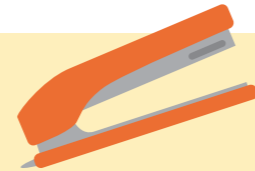
「マイプラン学習」も子どもが自立的に学ぶ学習ですが、「自学・自習」が協働的な学びであったのに対し、こちらは個別最適な学びになります。一般に「単元内自由進度学習」と呼ばれる学習方法で、子どもたちは単元のため、時間数、学習の流れ、利用可能な学習材や学習機会を記した「学習のてび



資料1  
6年生算数科の「自学・自習」。  
黒板の前には先生役の子どもが立つ



資料2  
本音でぶつかりあい、  
ともに学び深めていく子どもたち



き」と呼ばれるカードを参考に、各自が自分に最適だと考える学習計画を立案し、自らの判断と責任で自由に学び進めていきます。理科の実験なども、準備から片づけまですべて個別で実施します。学習の進行は各自に委ねられるので、ある一時間を見ると、同じ学級の子どもが異なるカードや活動に取り組んでいたりしますが、単元終了時に全員がねらいを達成すればよいのです。

資料3、資料4は、6年生社会科の歴史学習の様子です。縄文時代から古墳時代へと至る各時代の様子とその移り変わりについて、自ら問いを立て、その解決を目指してさまざまな資料を駆使した学習に取り組んでいます。教科書と資料集を丁寧に見比べ

ながら自分なりの理解を構築しようと頑張る子、タブレットを使っていきなり膨大な資料に分け入る子、一人で黙々と学ぶ子もいれば、友達と相談しながら学ぶ子もいます。学ぶ場所も、教室の自席が落ち着くという子もいれば、広いテーブルが使える理科室に移動する子もいました。

### 学習環境整備という教育の方法

「マイプラン学習」は学ぶ内容こそ決まっていますが、いつ何をどんな風を使って学ぶかは各自の計画やその時々を考え次第です。この学び方を下支えるのが、教師による学習環境整備です。たとえば、学習期間中、土器や埴輪、石器などのレプリカを博



資料3  
教室で友達と  
相談しながら学ぶ



資料4  
自分の学びやすいように、  
広いテーブルに移動して学ぶ

### 資料5 魅力的な学習環境整備



自分の計画で学び進める  
「マイプラン学習」



物館に見立てた余裕教室に設置し、いつでも自由に見たり触ったりできるようにしてみます(資料5)。すると、子どもたちは社会科の時間はもとより、休み時間にもやってきては、友達とおしゃべりしながら結構長い時間、それらと関わっていました。レポートで使うのでしょう、タブレットで写真を撮っていく子もいます。

注目すべきは、すべての子どもが資料5のような関わりをするわけではなく、何度もコーナーを訪れる子もいれば、ほんのわずかな時間しか滞在しない子もいることでしょう。この学習材が心に留まり、そこで得た実感や気づきを中心に学びを深める子もいれば、また別な学習材で学ぶ子もいます。大切なのは、一人ひとりが自分の琴線に触れる学習材と出合えることで、それが何であるかは子どもによって

実にさまざまです。だからこそ、教師としては可能な限りの多様な情報や物品を準備し、提供する必要があると思います。

子どもの都合でいつでも使える学習環境整備としては、教師用のデジタル教科書が入ったパソコンを大型ディスプレイに接続し、子どもに開放するといった工夫も考えられます。ここでも、盛られたコンテンツを隅から隅まで熱心に見る子もいれば、まったく見向きもしない子もいますが、それで構いません。

資料6は、どこの学校にもある教科書会社提供の大型の図版です。一斉指導では教師の都合とタイミングで一回きりしか見せないことが多いと思いますが、こうやって廊下に常時張り出しておけば、見たい子どもが見たいタイミングで見たいだけ見ていきます。



資料6 子どもの意思で資料にアクセス

子どもの探究心の  
きっかけになるよう、  
可能な限りの  
情報や物品を準備

ディスプレイに  
画面投影して  
みよう

実物や  
レプリカを  
手配してみよう



参考文献 奈須正裕(2021年)『個別最適な学びと協働的な学び』、東洋館出版社

まとめ

子どもが学び進めるといって、最後までたどり着かない子が出るのではないかと心配する人がいますが、いちばん遅い子でも時間内にほぼすべての課題を終えます。国立教育研究所の調査によると、単元内自由進度学習での子どもの実学習時間は、総学習時間の91%に達していました。驚異的な数字で、この学習の学習効率の高さを示しています。

加えて大切なのは、すべての子どもは生まれながらにして有能な学び手であり、適切な環境と出会いさえすれば、自ら進んで学ぼうとするし、学ぶ力を持っているという事実への注目でしょう。「教師が教えなければ子どもは学ばないし、学ぶことができない」という誤った思い込みを払拭することが、今まさに求められているのです。



特集

# 学校現場とSDGs

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



### 一般社団法人イマココラボと考える！ 私たちのSDGsトリセツ

SDGsに関する取り組みを推進する一般社団法人イマココラボの方と一緒に、「SDGsってそもそも何?」「子どもとどう学べばよいの?」といった率直な疑問について考えました。

▶ インタビューは p.8 から!



### SDGs 授業実践紹介! 理科 / 社会

実際の授業においてどのようにSDGsを取り入れているか、理科と社会それぞれの教科での実践例について、現場の先生方に教えていただきました。

▶ 実践紹介は p.12 から!



# 一般社団法人イマココラボと考える！ 私たちのSDGsトリセツ

「SDGs」とは、「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称であり、2015年に国連で採択された、国連加盟国が2030年までに達成すべき17の数値目標です。それに伴って、文部科学省が「持続可能な開発のための教育 (ESD) 推進の手引」を発行するなど、学校現場でもSDGs実現のための教育が求められています。

そこで今回は、国内でSDGsに関するワークショップなどを多数実施されている一般社団法人イマココラボの共同創業者/共同代表である稲村健夫さん・村中剛志さんをお招きし、私たちはSDGsをどのようにとらえ、関わりとよいか、T-Navi編集チームとディスカッションしていただきました。



2016年10月設立。  
オリジナルのカードゲームを活用し、楽しくシンプルにSDGsを理解できる「ワークショップ2030SDGs」を開催。企業の研修から学校教育に至るまで幅広い分野での実績があり、4年間で20か国25万人以上が体験しているほか、2019年には国連でも高い評価を受けている。



共同創業者/共同代表  
稲村 健夫



共同創業者/共同代表  
村中 剛志

## SDGsに取り組むきっかけ

—はじめに、お二人がSDGsを知ったきっかけや、イマココラボを立ち上げたきっかけを教えてください。

稲村：いきなりカミングアウトしますが、実は中学生くらいのときから、世の中の仕組みってなんか変だなという感覚がずっとあったんです。自然との関わりなどを考えたときにおかしいんじゃないかなと。ただ、企業の経済活動とか仕組みみたいなものが強大すぎて、大きくなってからも違和感と同時に諦めがずっとありました。そんな中、SDGsを知って「これだ」と思ったんです。世界は全部つながっている、という感覚でつくられていることや、非営利団体だけではなく企業が取り組むべきだという考えに基づいている点が魅力的だと思いました。しかも、国連で採択されているというお墨付きもありましたからね。

ただ、少しわかりにくい部分もあったので、広く普及させるためにカードゲーム「2030SDGs」を開発したところ、それが好評だったんです。

村中：そこで、会社を立ち上げてカードゲームをさらに広めようと、イマココラボを設立しました。SDGsって世界の制度だったり仕組みだったりの話なんですけど、それを変化させるためには個人の内面も変化させる必要があると私たちは思っていて。私はもともとそういった個人の内面の変化に興味があったので、こうした活動をしています。

## 2030SDGs

SDGsの17の目標を達成するために、2030年までの道のりを体験するカードゲーム。プレイヤーには「大いなる富」「環境保護」などそれぞれのゴールが与えられ、環境・経済・社会のバランスをとりつつ、多様なプロジェクトを実施し、その実現を目指す。



↓ 詳細はこちら ↓



## 子どもとSDGsを学ぶために

— お二人は子どもと一緒にSDGsを学ぶ活動もされたことがあると伺ったのですが、子どもにSDGsを学んでもらうときに気をつけることはありますか？

稲村：子ども相手だと、前提として「大人から子どもに教える」という枠組みになりがちなんですけど、実は大人も、SDGsを含め「地球でどう生きるか」ということについてそんなに深く考えていないんですよ。今地球上で起きていることを宇宙的な視点でふっと考えてみると、結構おかしなことが多いんですよ。ゴミが溢れて処理できていない世界があるのに、一方で私たちは新しいものを作り続けている、とか。そういう部分ってむしろ子どもの方が気づきやすい部分があるんじゃないでしょうか。

なので、子どもの中に広がる探究心や感覚を邪魔せず、疑問がちゃんと育つような関わり方をすることが大切だと考えています。



村中：そもそもSDGsがカバーする領域はとて広いので、「SDGsとは何なのか」という質問に対してこれだという限定的な答えはないんです。裏を返せば、SDGsについて子どもたちが考えたことや思ったことは全部正解なんです。なので、子どもを唯一絶対の答えに導くのではなく、それぞれの考えをそのままアウトプットしてもらうことを目指せるとよいのではないのでしょうか。知識を教え込むのではなく、子どもたちの話し合いをファシリテートするというスタンスで臨むのが大事だと思います。

もちろん、先生と子どもの知識量には差がありますし、子どもが自分の考えを深めるためにも、必要な知識を教えてください。フェーズも絶対に必要です。知識を教えるフェーズと子どもの考えを引き出すフェーズ、どちらかに偏るのではなく、両方をバランスよく実施できるといえばよいですね。

稲村：そして、もし可能であれば、子どもと話す前に、先生ご自身もSDGsを一度フラットに眺めて、自分はSDGsをどう思うか考えてみてほしいですね。「先生は、この目標はこう思うんだけど、ここはわからないんだ」とか「SDGsのこの部分に関してはまだ先生ももやもやしているんだ」というように、先生自身が疑問に思っていることを子どもに話すことができれば、子どもたちもより考えを深めていけるのかなと思っています。

## 子どもの探求心を育てる

— 子どもに教える、というよりは、子どもと一緒に考えるというスタンスが大事ということですね。小学生の年齢だと、どういった活動から始めるのがよいのでしょうか。

稲村：自然の中で遊んだり泥だらけになったりして、自然との親和性を体感してもらうようなことが、幼い頃には特に大切だと思っています。SDGsにおいては、幼く未完成な子どもたちに知識を与えて成長させるというよりも、自然に大きくなっていく子どもたちを、いかに剪定せずのびのび成長させられるかを考えていただきたいです。

先ほど話題に上がったカードゲームを使った学習などは、実は結構難しいので高学年くらいからがよいのかなと思います。特に低・中学年のうちは、外で遊ぶ経験を積ませてあげたり、言いたいことを言っても怒られない環境を作ってあげたり、子どもたち自身の探究をサポートしてあげるのが大事だと思います。

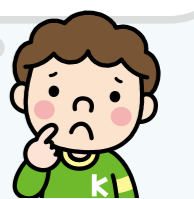
村中：SDGsの〇番は〇〇の目標、みたいなことを覚えていくより、自然の中で遊びながら、自分たちの生活と自然がつながっていること、人と人との生活がつながっていることを実感していく方が大事かなと思います。

急にSDGsの目標だけ学んでも、子どもにはきっと響かないですね。自分ごととして考えてもらうためには、子ども自身で「これはなぜだろう」「これはおかしい」という問題意識をもつことが必要なんです。子どもが問題意識を見つけられれば、ほとんどの場合、SDGsの17の目標の中に近いものがあります。最初から守るべき目標としてではなく、自分の問題意識を解決する手段としてとらえると、子どもにとってもSDGsが受け入れやすくなるのではと思います。

海水浴に行ったら  
ゴミがたくさん…。  
いいのかな？



どうして学校に  
通うんだろう？



SDGsは「処方箋」

— お話を伺っていて、「SDGsは目標ではなく手段なのだ」という言葉が印象的でした。

村中：SDGsが国連で採択された当初の文書のタイトルって、実は「SDGs」ではないんですね。“Transforming Our World”という英語のタイトルで、和訳すると「我々の世界を変革する」という意味になります。国連が合意したのは“Transforming Our World”で、SDGsはその手段なんです。

“Transforming Our World”をどう自分ごとに落とし込むのかという考え方は人それぞれあるのですが、我々は社会の仕組み、制度、慣習などの外側の変革はもちろん、個人の内面であったり、どうやって生きるかという部分も両面で変化していく必要があると考え、カードゲームをはじめとするイマココラボの活動をしています。

稲村：SDGsは、例えると処方箋なんです。症状を自覚していないのにいきなり薬だけを渡されてしまうと、「なんで私はこの薬を飲まないといけないの？ それって本当に効くの？」ということになってしまいますよね。まずは、その裏側にある症状というか、世界の現状に思いを馳せることが必要なんです。

ちなみに、症状の部分は、「自然環境」と「人間をとりまく格差・貧困」という大きく二つのテーマに分けられます。小学校だと、理科と社会のお話ととらえることもできるかもしれません。その二つの観点から世界を見たときに、出てきたのがこの17の目標だったんですね。

そして、元気な状態になるためには薬を飲むように、SDGsの向こうには目指したい姿があります。ただ、目指

したい未来は人によって異なりますよね。だから、SDGsには「とりあえずこれで」みたいな部分があるんです。全然違う未来を目指す人たちが、それでもこの17の目標であれば自分の目指す未来が実現できそう、といったん合意できたんです。そして、現状が厳しいので、「無理やりかもしれないけどとりあえずここを目指しましょう」という数値目標を設定したんですね。これがSDGsの成り立ちです。

村中：なので、SDGsってゴールじゃなくて通過点なんですよね。これだけが正解ではないかもしれないけれど、まずはここを目指したらいいんじゃないかという一つの方向性なんです。

— 「世界を変革する」という目的を忘れ、数値目標を達成することに躍起にならないよう、気をつけたいと思いました。

稲村：そうですね。たとえばお金も一つのツールでしかないのですが、お金を得ること、貯めることが目的になってしまうことも多い。目的になりがちなものに対して、「これってあくまで手段よね」という視点をもつことが必要だと思います。



▲T-Navi編集チームも一緒に議論しました。

「あなたはどんなのがいい？」

— 症状の部分には、理科（環境）のお話と社会（格差や貧困）のお話があるのとって、理科と社会の授業ではそういった現実の部分からSDGsを考えるアプローチができておりました。

稲村：そうですね。また、別のアプローチとしては、単純に「あなたはどんなのがいい？」という問いかけから考えてみることもできます。「あなた」というのは、個人の偏愛やこだわり、つくろわない自分のことで、「どんなの」というのは社会の仕組み、制度、慣習のアイデアなどを想定しています。現実の慣習などはいったん置いておいて、純粋に理想を考えてみるんです。たとえば、「こんなにネットが発達しているんだから、政治も政党制じゃなくて、法案ごとの個別投票でいいじゃん」なんていうアイデアも出てくるかもしれません。一見、荒唐無稽に見えるかもしれませんが、制限をかけずに理想を考えていくことは、SDGsを達成するうえでも必要です。

— 先生方が、自分にとってのSDGsを考えてみたいと思ったときにも使えそうなアプローチですね。

村中：そのときはぜひ、あるべき正解を答えようとするのではなく、子どもたちと同じ目線で、ありのままの自分の理想を考えていただけるといいと思います。例えるならば、ふろしきを広げるように、自分のこだわりや偏愛を全開にして考えてみてください。

稲村：ふろしきを広げる、みたいなことは低学年の子の方が得意かもしれませんね。むしろ閉じ方を知らなかったり（笑）。

村中：そう思うと、理科・社会をまだ勉強しない低学年の子どもにも積極的に取り組んでもらえるアプローチですね。

SDGsに懐疑的な意見が出たときは

— 実は本日、「SDGsに対する懐疑的な意見が子どもたちから出たらどうすればいい？」というご質問を用意していたんです。ですが、強引に答えるのがよいという訳ではない気がしてきました。

村中：まず、子ども自身が疑問をもっているということがすばらしいですね。その子の感覚をきちんと表現できているわけですので。自分がどう生きていきたいかの方向性をすでに体現し始めていることに対して、素直に「おめでとう」と言いたいです。

稲村：一つ補足させていただくと、その瞬間、その子をちゃんと見てほしいなと思います。その子が自分のこだわりや理想を自覚し、ふろしきを広げた状態で思わず口に出してしまったのであればすばらしいなと思います。一方で、周りの大人から影響を受けて、何かをインプットしたときにいったんシニカルに（皮肉っぽく）否定するのが癖になっている子もいて、そういう子にはまた別の関わり方があると思います。だから、しっかりその子を見てあげて、どうしてそう思ったのかフラットに聞き出してあげるのが大事なのではないかと思います。

— SDGsに対する懐疑的な質問は、その子の可能性を広げるチャンスですね。

村中：まさにチャンスです。そして、先生がそれに正解で答えようとしてしまったら、そういう大人の自分がいることにも気づけるといいですよ。「SDGsは正しいんだ、目指すべきものなんだ」と決めつけた接し方をしてしまうと、その子はせっかく広げたふろしきを閉じざるを得ないので。それってすごくもったいないですよ。

— 大人側が、いきなりふろしきを閉じさせようとしないで、まずは子どものことをよく見る、ということが大事ですね。

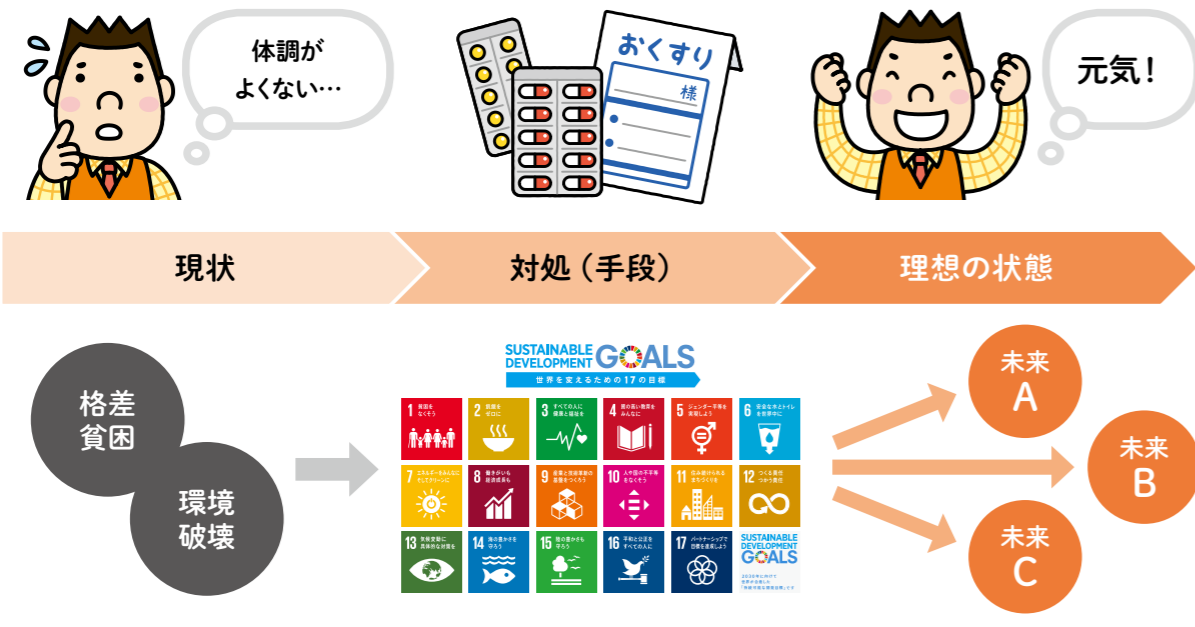
稲村：前半でもお話ししたように、SDGsに正解はないので、子どもたちには自由に自分のふろしきを広げてほしいし、先生方には子どもがふろしきを広げられる環境を用意していただけるとよいと思います。



まとめ

いかがでしたか？ しっかり考えると大人にとっても難しいSDGs。無理に正解を見つけようとせず、子どもたちの素直な考えを大切にしながら一緒に考えていけるとよいですね。

自分のクラスでもSDGsを取り入れてみたいと感じた先生方！ p.12~13では、実際に理科と社会の授業でどのような実践ができるかをご紹介します。ぜひそちらも併せてご覧ください。





## 今知りたい！ SDGs授業実践紹介！理科／社会

「SDGsを授業で取り入れたいけれど、まずは何から始めればいいのか…」と感じている先生に向けて、宝仙学園小学校の吉金佳能先生と、横浜市立幸ヶ谷小学校の宗像北斗先生に、SDGsの授業実践をご紹介いただきました！

### 理科の授業での実践をご紹介します！



#### 6年 生物と環境

宝仙学園小学校  
吉金 佳能

SDGsは地球の未来を考える重要な視点の一つです。世界共通の問題であり、自然と意識できるように、理科学習においてもさまざまな場面で取り上げています。

一般社団法人Think the Earthの手がける「SDGs for School」というプロジェクトでは、SDGsについて「学びから行動へ移すための5ステップ」を提案しています。SDGsをテーマにした授業をつくる際には、この5ステップを意識しています。

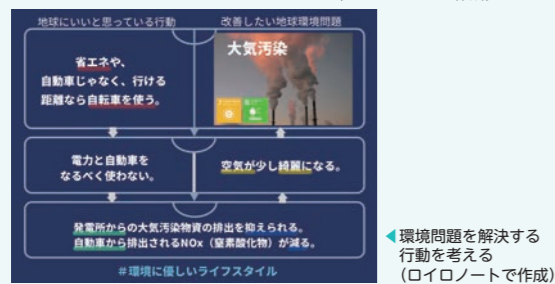
- 1 SDGsを学ぶ
- 2 SDGsで学ぶ
- 3 SDGsを体感する
- 4 SDGsでつながる
- 5 SDGsの本質的課題解決行動へ

今回紹介する実践は、「SDGsで学ぶ」段階の活動です。子どもたちは、事前に国語でSDGsについて学習をしていました。理科では単元のはじめに、どのような地球環境問題があるのか、インターネットを使って個々に調べ、全体で共有しました。

その際、調べた問題と関係の深いSDGsを結びつけて、画像のような1枚のカードをつくりました。子どもたちは、提出されたカードを分類したり、その問題を解決するためにできる行動について考えたりしながら、地球環境問題についての考えを深めていきます。



▲子どもが作成したカードのイメージ (ロイロノートで作成)



その後、学習のアウトプットとして、興味をもった地球環境問題について動画制作を行いました。動画では、

1. 自分が紹介したい地球環境問題の名前
2. 地球環境問題の原因
3. 地球環境問題に対して人ができるアクション

この三つについて、約30秒の動画で紹介しました。動画は、端末に入っているプレゼンテーションソフト(Keynote)やiMovie、ロイロノートなど、子どもが作業しやすいツールを選択して制作しました。出来上がった動画を、班の人と見せ合い、互いにフィードバックを行いました。

人は誰かの行動を変えることはできません。しかし、行動を変えるきっかけをつくることはできます。子どもたちは、見えない相手を想像しながら、動画を見た人が少しでも行動を見直すことを目標にこの活動を進めました。

同じ学習を、動画制作ではなく、SNS風ツイートという形で行ったこともあります。ロイロノートで画像のような枠を作り、メッセージと写真・イラストを入れて、インパクトあるツイートを考えた活動です。

こうしたアウトプットを活動に位置づけることで、問題をより自分ごととしてとらえ、学びを深めることができると実感しています。

### 授業ではこんな工夫をしました！

地球環境問題、SDGsという大きな問題を、小学生の視点に合わせた学びにしたことがポイントです。問題を自分ごととしてとらえ、自身の行動と結びつけて考えていくことを目指しました。また、SDGsを学ぶうえでは「トレードオフ」という考え方を知ることが必要です。何かを達成するためには、犠牲にしなければならないものがある、という考え方です。地球によいと思っている行動が、意外なところで犠牲を生んでいることもあります。そうしたことを具体例をもって伝えることで、物事を批判的に見る力、多面的・多角的に考える力が養われると考えています。

参考資料 一般社団法人Think the Earth「SDGs for School」

### 社会の授業での実践をご紹介します！



#### 5年 水産業

横浜市立幸ヶ谷小学校  
宗像 北斗

本校はユネスコスクールに加盟しており、「自分、友だち、社会の幸せをつくる子ども」の学校教育目標のもと、中核理念にESD(持続可能な開発のための教育)が位置づいています。教育課程全体で育てたい資質能力の一つには「持続可能な社会の創造に貢献する力」があり、総合的な学習の時間を中心とした各教科の単元目標と、SDGsの17の目標を紐づけながら授業づくりの工夫を行っています。

先生方は、「エシカル消費」という言葉を耳にしたことがあるでしょうか。消費者庁のサイトで「人・社会・地域・環境に配慮した消費行動」と説明されているこの言葉は、持続可能性の観点から消費者の意識変容を目指して生まれたものだと思います。

そのような「エシカル消費」をするときに参考になるものとして、さまざまな産業が商品に付けている「認証ラベル」があります。この「認証ラベル」を「社会科で取り上げられる単元例」とともに列挙してみます。

認証ラベル	どのようなものに貼られるか	単元例	SDGsとの関連
	持続可能な漁で獲られた水産物(MSC「海のエコラベル」)	5年 水産業	12, 14
	適切な森林管理に貢献する商品(紙製品など)	5年 林業	12, 15
	生産者への適正な価格の支払い、労働環境保護、農業使用規制、等の国際フェアトレード基準をクリアした製品	6年 国際協力	1, 2, 12

今回はこの中から、MSC「海のエコラベル」(以下、MSCラベル)を取り上げた実践をご紹介します。

まずは、2016年に「MSC漁業認証」を受けた、宮城県塩釜市にある「M漁業」さん(カツオ漁を中心とした漁業を行う会社)に取材をしました。そのときに、代表取締役のMさんから「100年先、1,000年先を考えた漁業を…」という話を聞き、これは単元構想の中核に据えたい言葉だと感じました。

第7時の後半には、MSCラベルが付いている商品を選ぶかどうかという判断の場に立たせるシミュレーション(MSCラベルが付いているカツオには10%高い値段を表示)を行いました。シミュレーションをしてみると、「やっぱり安い方を…」「わかっているんだけど…」とMSCラベルが付いていない商品を選ぶ子が数名いました。その後、子どもたちは、Mさん(MSCジャパン)からの「持続可能な漁業の担い手は、実は消費者であるみなさんなのです」という言葉に出会い、学んでいきました。



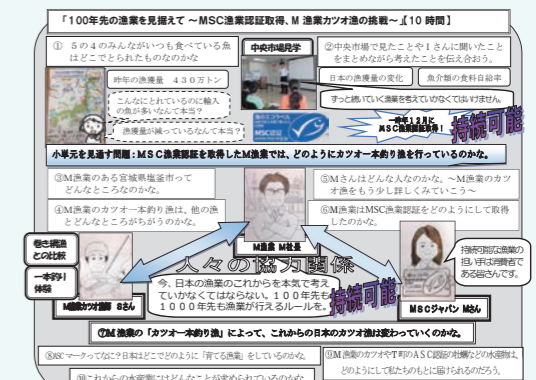
▲MSCラベルについて学ぶ子どもたちの様子

参考サイト エシカル消費とは？ | 消費者庁 (https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer\_education/public\_awareness/ethical/about/)

新学習指導要領[内容の取扱い]には、「消費者や生産者の立場などから多角的に考えて、これからの農業などの発展について、自分の考えをまとめることができるよう配慮すること」とあります。今回の実践から、子どもたちは漁業における課題に対して、いち消費者としての立場から「商品の価値を感じ、買い支えていく」という社会参画の仕方を学べたのではないかと感じています。

### 授業ではこんな工夫をしました！

最近、食料生産単元の実践を見るたび、子どもたちが第一次産業における諸課題にばかり目を向けがちであることが気になっていました。社会のつくり手となる子どもたちが「日本の食料生産」について学んでいく際、未来志向を育てていけるような単元構成の工夫ができないものかと考え、着目したのがMSCラベルです。その認証を受けたり広げたりしようとする「人」の営みに着目しながらSDGsを学ぶことで、子どもたちがより切実感をもって追究することができるのではないかと考えました。



▲「100年先の漁業を見据えて～MSC漁業認証取得、M漁業カツオ漁の挑戦～」の授業展開の図

### 子どもたちからはこんな声も！

今、日本の食料生産がピンチだということをこの授業をするまで知りませんでした。自分たちが当たり前で食べているのは、いろいろな人たちが協力してくれているから何とかなっているのです。その人たちの努力をむだにしてはいけないと思います。今、この世の中を変えられるのは未来がある私たち子どもたちしかいません。自分たちもお米をつくる人や魚をとる人たちの力になっていくことができることも分かりました。まず日本の国を知ることが第一歩。そして「今、自分たちにできることを本気で考えていく」ことが大切だとわかりました。

学習後には子どもたちからさまざまな感想が上がり、中には学習をきっかけに、イギリスに出張した父親にファストフード店のハンバーガーに付いていたMSCラベルを持ち帰ってきてもらった子もいました。(当時はまだ日本のものにはMSCラベルが付いておらず、日本と欧米の取り組みの進み方の違いについても熱心に調べていました。)

SDGsとの関連性を意識しながら実践を重ねる中で、子どもたちが積極的に社会に関わりようとするだけでなく、社会に変化を与えていくような可能性を感じ始めています。「この子たちがつくる未来のために…」と、先生もまた、未来志向をもちながら授業を構想していくことはとても楽しいことだと思います。

食料生産単元の最後に子どもがノートに書いた振り返りの一部

2022年度  
新学期

新  
見本

できることから一つずつ

# テスト見本スリム化のご案内

光文書院の

## 「SDGs宣言」



SDGs (持続可能な開発目標) の達成に向けて、世界中のあらゆる個人、企業がアクションを始めています。一人ひとりの子どもたちの明るい未来を守るために、同じ地球上に存在する責任ある一企業として、光文書院も新しい取り組みにチャレンジしてまいります。

2022年度、光文書院では、商品ラインナップはそのままに、資源循環の最適化を目指し、テスト見本を“スリムで見やすい”新デザインに変更いたします。見本をまとめることで、従来に見本点数から、テスト見本の点数を60%以上削減します。

例えば、国語テストはこんな風になります



1冊の見本で、2種類のテスト、  
学期制が検討できます！

Aテスト・Pテスト が1冊に！  
2学期制・3学期制

- \*お届けするテストの見本は1学期の内容です。
  - \*お届けする「まとめ」のテストは「1学期のまとめ」となります。
- ※AテストとPテストと同様に活用系VテストとVPテストも合本となり、1冊でご検討いただける形となります。

見本の量を減らすことで、地球環境にやさしく

見本がまとまることで

Aテスト Pテスト

これまで2種類あり  
見比べるのが大変だったのが…

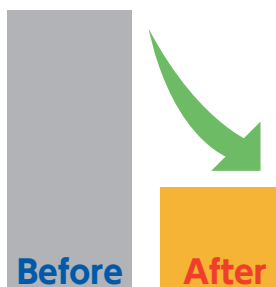
Before



一つになって  
コンパクト！

After

テスト見本点数を60%以上削減！



約63%  
削減！

※商品のラインナップ自体に変更はありません。 ※共通した準拠の合本となります。 ※グラフは当社比です。  
※本書に記載の見本画像は制作中のものであり、予告なく変更する場合があります。予めご了承ください。



# 道徳

教えて！加藤先生

教えて！土田先生



千葉大学教育学部教授

土田 雄一

『小学道徳 ゆたかな心』(光文書院)監修

筑波大学附属小学校教諭

加藤 宣行

『小学道徳 ゆたかな心』(光文書院)監修

## 指導と評価の一体化を 見つめ直して

道徳科の評価は何のためにするのでしょうか。「子どもたちの学習状況の評価」をするとともに、「教師の授業評価(授業改善につなげる)」が目的です。そして、他者との比較ではなく、「認め、励ます個人内評価」をしながら、子どもたちの成長を支えることが道徳の評価です。

しかし、「働き方改革」の波のなか、道徳科の評価が「形骸化」していないか心配です。「通知表にどのように記述するか」ではなく、それまでにどのように関わるかが教師と子どもの評価です。成長を総合的に見取る「総括的評価」も大切ですが、プロセスで関わり、子どもの成長を見取る「形成的評価」を大事にしてほしいのです。一人一人に声をかけ、認めることも評価です。「子どもの成長を支える関わりができたか」は、「ねらいを達成する授業ができたか」と併せて考えたい「教師の自己評価」です。また、道徳科は自分の生き方を考える時間です。「子ども自身の自己評価」も大切にしたいですね。

これを機会に「指導と評価の一体化」について、もう一度見つめ直してみませんか。

## 指導と評価の一体化に つながるもの

学期末の道徳科の評価では、苦心された先生方も多いのではないのでしょうか。敢えて「苦心」という言葉を使ったのは、現場での温度差が未だにあるように感じられるからです。道徳の評価をどのようにしたらよいか分からない、形だけが先行してしまい、書きたいことを書くことができない、そもそも道徳の評価は必要なのか、というような疑問も根強く残っている気がするからです。

道徳科の評価に関しては、個人の変容を大きくりに、具体的に文章表記するといわれています。私は、指導要録と、いわゆる通知表では、その内容を書き分けるべきだと考えています。少なくとも子どもや保護者が目を通す通知表には、教師サイドの視点ばかりでなく、子ども目線の認め、励ます評価の表記を工夫したいものです。それこそが指導と評価の一体化につながるものではないでしょうか。

子どもたちが読み、「ああ、確かにここを頑張ったな。自分の意見をきっかけに、みんなの役にも立っているんだな。自分のためにも、もっと頑張ろう。」このような思いを子どもたちにもたせることができれば、評価も授業も、もっと楽しくなるような気がしませんか。

# 指導と評価の一体化」に向けて

2018年度に道徳科の評価が始まってから3年が経過しました。道徳の評価はどのように実施すべきか、どうすれば「指導と評価の一体化」が実現できるか、お悩みの先生もいらっしゃるかもしれません。そこで、本誌では3名の先生をお招きして座談会を実施。その模様を2号連続の特別企画でお届けいたします。

前編となる今回は、長岡先生のご経験を中心に、日々の授業の評価の仕方や、評価を実施するうえで教師に大切にしてほしいことをテーマにお話いただきました。



敬愛大学  
教育学部  
こども教育学科  
教授  
市川 洋子



摂南大学  
教職支援センター  
特任講師  
谷口 雄一



豊中市立  
島田小学校  
長岡 かの子

## 私の評価の仕方

**市川**：はじめに、実際に学校現場でお仕事されている長岡先生は、普段どのように道徳の評価を行われているのか教えていただけますか。

**長岡**：私は、子どもにとっていちばん意味があるのは、通知表や指導要録の評価ではなく毎回の授業ノートへのコメントだと考えています。私のクラスでは『道徳ノート』を使っているので、毎時間、子どもが書いたコメントをしっかり読み、気づいたこと、考えたことを「ちゃんと見たよ」ということを私からのコメントで伝えるようにしています。指導要録は子どもの手元に届かないこともあり、子どもとのつながりを考えると毎時間のやり取りが大切なかなと感じています。



▲毎時間の子どもの気づきへの  
フィードバックを大切にしている。

**谷口**：「評価」という言葉は、学期末とか年度末の締めくくりというイメージがとても強いのですが、「指導と評価の一体化」を実現するためには毎時間の評価がとても大切だと思います。子どもたちが考えたことについて、道徳の評価のキーワードを借りれば「認め励ます」「すごいね」「そういうこと考えるんだ」などの声かけを続けることが必要です。

**市川**：前提として、「評価」には、指導要録や通知表に書く成績を付ける“evaluation”（エバリュエーション）と、**子どもの成長を見取るためにさまざまな情報を集め、その情報をもとに教師がフィードバックを行う“assessment”（アセスメント）**の2種類があります。

私は、道徳に必要なのはアセスメントのみだと考えており、日々の授業の中で、子どもたちの成長を見取れるような情報を収集することがとても大切だと思います。

長岡先生は、コメントや評価をするとき、子供の成長をしっかり見取るためにどのようなことに気をつけていらっしゃいますか。

**長岡**：その子の言葉を取り入れて評価するように気をつけています。例えば、「親切の大切さについて考えました。」という評価は子ども全員に当てはまってしまうですね。そうではなく、子どものノートの言葉を用いて、「本当の親切とは〇〇ということだと考えました。」というように、その子だけの変化をしっかりとらえた評価ができるように気をつけています。

**市川**：さらに言えば、子どもがもともと持っている部分ではなく、**授業の中で成長した部分を評価したいですね。**例えば、「優しさの大切さに気づきました。」というような評価もよくあると思うのですが、ほとんどの子どもはもともと「優しさ」の大切さを知っていると思うんです。

**谷口**：「優しさ」の例であれば、場面に応じた適切な

行動は何か、具体例をたくさん考えることができれば多角的な見方ができるようになったといえると思います。全員に当てはまる定型文の評価ではなく、一人ひとりをしっかり見てオーダーメイドの評価ができるとよいですね。

## 言葉だけではない見取り方

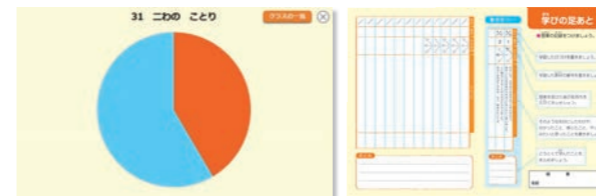
**市川**：ノートを通じて日々の評価をする中で、難しさを感じる場面はありますか。

**長岡**：ノートを書くことが苦手な子どももいるので、そういった子をどのように評価すればよいのかが難しいと感じています。

**谷口**：私が小学校の教員をしていたときは、給食や掃除の時間などの雑談の中で「前の授業であまりノート書けていないみたいだったけど、どう思った？」と聞いてみたり、ゼロから答えさせるのではなく「こんな考えとこんな考えがあったけど、どっちの考えに近い？」というような答えやすい質問を投げかけてみたりしていました。

あとは、「他の子の意見を聞いたときにじっと考え込んでいたよね。」というように、授業中の様子から内面を探ってみるのもよいと思います。

**市川**：一人ひとりの授業の様子を細かに観察することは難しいので、「こころツール」の心情円盤や「学びのあしあと」の矢印の動き・顔の表情など、言葉を使わずに内面を表現させられるツールを活用するのも有効な手段かもしれませんね。



▲こころツール

▲学びのあしあと

## 道徳科の評価 4つのポイント

- ポイント ① 学期末・年度末だけでなく、毎時間の評価も大切に！
- ポイント ② 授業を通しての子ども一人ひとりの変化をとらえ、評価する！
- ポイント ③ 言葉を使わずに内面を表現できるツールも活用する！
- ポイント ④ 周囲の人と自分をつながっていける授業づくりにもトライ！



▶▶ 後編は、6月発行予定のVol.12に掲載！ お楽しみに！



## 相談者・相談内容：児童の考えを深める授業



横須賀市立長井小学校  
石橋 直生 先生

内容項目「感動」の教材について、ねらいとする道徳的心情のとらえ方を教えてください。  
授業では、「王子のよさが分かるということは、みんなも感動する心をもっている」ことを押さえたのですが、さらに深めるには、どのような手立てが必要なのでしょうか。

2年

【主題名】  
うつくしいところ

【教材名】  
しあわせの王子  
(光文書院)

主題を通して考えたいこと

<●感動、畏敬の念>

●目に見える綺麗なもののだけでなく、目には見えない綺麗なものがあることを知り、そのよさに感動する心を自覚させる。たとえ王子と同じ行為をすることが難しくても、王子の心の綺麗さに感動し、その感動した自分の心のよさを感じさせたい。



## 本時の展開

学習活動	手立て
<ul style="list-style-type: none"> <li>○「綺麗なもの」について、授業をする前の考えを明らかにする。</li> <li>○金の銅像とさびれた銅像を比較し、綺麗なものについて考える。</li> <li>○教材を読んでもう一度金の銅像とさびれた銅像を比較し、綺麗なものについて考える。</li> <li>○目には見えない心の綺麗さについて考えを深め、そのよさを感じる。</li> <li>○つばめの心情の変化に着目する。</li> <li>○王子の心に感動する心が自分にもあることを自覚する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●授業をする前の子どもの価値観を明確にする。そして、教材を読む視点をもたせる。</li> <li>●さびれた銅像の見た目は綺麗ではないが、目には見えない心の綺麗さを明らかにさせる(導入時との考えと比較して考えさせる)。</li> <li>●南に帰るつもりだったつばめを取り上げ、なぜ帰らなかったのか考え、心のよさの広がりを感じさせる。</li> <li>●王子と同じ行為ができるかではなく、王子の心が綺麗だと思ふ心が自分にもあることを理解させる。</li> </ul>

## 本時の板書



## 授業で工夫した点

### ① 子どもの考えの変容

導入で綺麗なものとして子どもが挙げるのは、目に見えるものがほとんどだと予想した。展開部分で王子の心の綺麗さ(目には見えない)について触れ、その違いを比較し、授業の中で子どもの考えが変容しやすいよう工夫した。

### ② 数値や表情を使った板書

低学年ということもあり、綺麗さのレベルを数値化したり、気持ちを表情で考えさせたりすることで理解しやすいよう工夫を行った。さらに、子どもが板書に参加しやすいようにした。

## 授業の内容 (T:教師 C:児童)

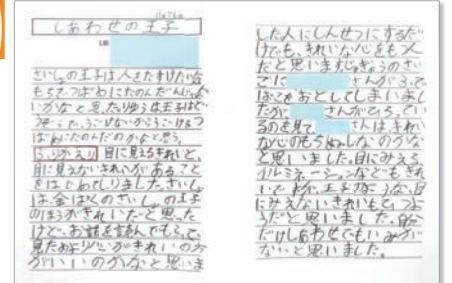
T: 綺麗だと思うものはなんですか。  
C: 海。  
C: 花火。  
T: では、この2枚の絵は、どちらが綺麗ですか。  
(左…金箔の王子、右…さびれた王子)  
C: 左の絵。  
C: キラキラしている。  
T: 綺麗レベルはどれくらいですか。  
C: 左は100で右は3ぐらいかな。  
T: 今日は『しあわせの王子』というお話です。お話を読んだ後に、もう一度どちらが綺麗か聞きますので、考えましょう。

(教材範読後)

T: どちらが綺麗ですか。  
C: 右かな。  
C: ん～どちらも綺麗。  
T: 最初に聞いたときはみんな左の絵のほうが綺麗と言っていたのに、なぜ意見が変わったのでしょうか。右の絵は、さびれているし、宝石はついていませんよ。  
C: 王子の心が優しく困っている人にあげた。  
T: 宝石をあげたら綺麗レベルは下がるのではないですか。  
C: 助けてあげた。最初は悲しい顔をしていただけで、王子が宝石をあげて笑顔になった。  
C: 心が綺麗。優しい心。  
T: なるほど。でも王子はさびれちゃったから悲しい顔ですね。題名は「不幸な王子」の方がいいのではないですか。  
C: いやいや。困っている人が笑顔になったから王子も笑顔になった。笑顔がうつった。  
C: 王子は自分の使命をはたせてうれしい。  
C: 王子はつばめに持って行ってもらえてうれしい。  
T: つばめは南に行きたかったのではないですか。  
C: 王子に頼まれたから行かなかった。  
T: 頼まれたから、本当は南に行きたかったけど、しょうがなくやっちゃったことですか。  
C: ちがう。笑顔がうつったのと同じで王子の優しい心がうつったんだよ。  
C: 王子の綺麗な心がうつった。  
T: そういうことなのですね。今気づいた「綺麗」は授業の最初の「綺麗」と同じですか。  
C: ちがう。最初は目に見える綺麗だったけど、勉強したのは目には見えない感じられる綺麗なもの。  
T: とても大切なことに気づきましたね。王子やつばめの心が綺麗だと思える皆さんの心が先生は綺麗だと思います。それでは、授業をしてみても感じたことを素直に書いてみましょう。

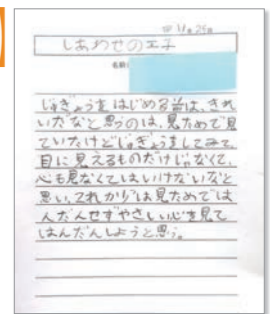
## 子どもの反応

### 【A児の振り返り】



●目には見えない綺麗なものがあることを初めて知り、そのよさに感動している。  
●学習したことをクラスの友だちに当てはめて、自分ごととしてとらえ、多面的・多角的に考えることができています。

### 【B児の振り返り】



●授業の前後での考えの変容を感じ、書くことができています。  
●振り返りの最後に「これからは～」と書き、学習したことを自分の生活につなげようと考えていることができています。

## ここはナイス！ 価値観を揺さぶり、 視点を広げる



本授業のナイスな点は、石橋先生が授業のストーリーをご自身で考え、構成しているところです。例えば、導入で金箔の王子と、そうでない王子を比較させ、子どもたちの「綺麗」に対する意識を自覚化させている。それをきっかけに、「初めと考えが変わった」という意識をもたせることに成功しています。考えが変わったというのは、自分の「ものごと」をみる視点が変った＝広がった、深まったということです。道徳の授業は、このように子どもたちの視点(価値観)を揺さぶり、膨らませていくところに醍醐味があると思います。

## わたしなら こうする！ 子どもの 発言を生かす



石橋先生は、「綺麗」に対する意識の変容を追っていかれていますが、「心の美しさ」に発展するところで、教師の方から「美しさ」について話をしてあげてもよかったかもしれません。また、授業中に子どもたちの方から「笑顔がうつった」「優しい心がうつった」というような発言が出ていますが、これは素敵な言葉です。私だったら、この子どもの言葉を使って、「優しい心がうつったのはつばめだけかな」と問い返したと思います。そして、「みなさんにも優しい心がうつった」「うつったあなたがたにも優しさがあり、だからこそ王子の心に感動したんだ」「優しい心は美しい心、そのような心が表面にうつった人が素敵だね」というような展開にできれば、子どもたちの発言を生かした授業になるのではないのでしょうか。

# デジタルで「道徳」

第3回  
「ふせんツール」の活用

千葉県富津市立  
富津小学校  
礒部 光泰 先生

光文書院『デジタル教材 道徳（デジ徳）』（以下『デジ徳』）に搭載されている実践ツールの1つ、「ふせんツール」を使った授業実践事例を紹介します。

内容項目 善悪の判断、自律、自由と責任 教材名 おかあさんとの やくそく（光文書院2年）

## 「ふせんツール」とは…



自分や登場人物の思いや考えを、デジタル版の「ふせん」を使って表現できるツールで、1回の授業で3枚まで、授業展開に合わせて使用することができます。ふせんは赤・青・黄・緑の4色あり、板書する際に使用するチョークの主な色とも同じなのもポイントで、低学年から高学年まで幅広く活用できます。ふせんは、文字を入力することで保存できます。今回の授業実践では、選んだふせんに、出席番号を入力しました。

## 1 対話的な学びに導くツール

『おかあさんとの やくそく』は、遊ぶ約束をした時間に来ない友だちに対して、主人公の「てつやさん」がどのようなメッセージを送るべきかを考える教材です。相手の気持ちを考えた上で、よりよいメッセージはどのようなものかを、みんなで話し合う際に、「ふせんツール」を活用しました。



◀「ふせんツール」を使う子ども

1枚目のふせんは、「てつやさん」が送ろうとしたメッセージに対して、どう思うかを話し合うために導入の場面で使用しました。「みんな、このメッセージはどう思う？」と問い、よいと思う場合は「赤」、よくないと思う場合は「青」のふせんを選ぶことにしました。

（中・高学年では、実際に考えを打ち込んで伝えることができますし、低学年でもふせんの色を使って、自分の考えを十分に伝えることができます。）



◀「ふせんツール」を使って、メッセージに対する印象を表現できる

この場面では上の画像のように、青いふせんが並び、ほとんどの子どもがこれは「よくない」と考えました。お互いの色を確認すると、「そうだよね！ だって友だちのことを考えていないよ」と対話が自然と生まれました。

そこで、本文の『おかあさんとの やくそく』から、相手が「悲しくならない・自分がもらってうれしい」、よりよいメッセージはどのようなものかをさまざまな角度から話し合いました。

「どんなメッセージなら、自分だったらうれしい？」と問うと、「遅くなってもいいよ！」の遅れ心配タイプ、

「いつ来られる？」の時間確認タイプ、「どうしたの？大丈夫？」などの友だち心配タイプ、「来ることを楽しみにしているよ！」などの安心うれしいタイプと、4つのタイプに分類することができました。

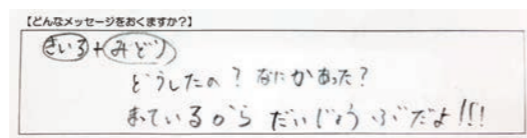


◀対話する子どもたち

## 2 考えが広がるツール

4つのタイプそれぞれを、赤・青・黄・緑に色分けし、「自分だったらどの色を送る？」と問いかけ、2枚目のふせんに4色から選ばせました。そして、選んだ色をもとに、自分の言葉でメッセージを隣の子に伝えてみました。さらには、自分が選ばなかった色でもメッセージを伝えてみました。（タイピングができる場合は、ここで実際に打ち込んだものを見せてもよいと思います。）そして、最終的に自分が一番「よい」と思ったタイプを3枚目のふせんを使って、選びました。

選んでいると「先生、1つに選べないかも」「2つ選んでもいい？」などの相談がありましたので、「どんな組み合わせがいい？」と発問しました。子どもたちからは「時間の確認は大事だけど、一言安心できる言葉があるとうれしいな」との声が聞こえてきました。



▲ふせんの色を組み合わせることで子どもが考えたメッセージの例

「ふせんツール」を使って分類することで、子どもたちの考えを整理することができます。

さらには、友だちのふせんと自分のふせんを組み合わせることで、よりよい考えがどんどん広がっていくことを子どもたちは実感しました。

# デジ体座談会 ～ボール運動領域を中心に ICTの活用を考える～

東京学芸大学教授  
鈴木 聡

日本女子体育大学准教授  
須甲 理生

日本体育大学教授  
白旗 和也

デジ体の制作に関わった2名の先生と、小学校現場でICTを活用した授業をされている2名の先生をお呼びし、思いや考えを伺いました。



デジ体  
デジタル体育

体育の各領域における「正しい動きの例」「つまづき例」「練習法」などが動画で確認できる光文書院のデジタル教材です。



川口市立原町小学校教諭  
江口 竜太

徳島市千松小学校教諭  
三木 アカネ

## ICTを活用した体育授業の実践例

白旗：本日は、前回のデジ体座談会（※）では話題に取り上げなかった「ゲーム・ボール運動」におけるICTの活用を中心に話を深めていけたらと考えています。まずは、これまでに行ったことがあるICTを活用した体育の授業について、江口先生と三木先生にお話を伺います。

江口：体育の授業では、三つの点を意識してICTを活用しています。①動きのイメージの共有、②動きの比較、③自分の動きの把握です。課題の発見や、動きの質を高める目的で、上記①②③を行います。実践した領域は器械運動が多いです。たとえば、跳び箱で伸膝台上前転に初めて取り組む際、膝や腰の動きを視覚的にとらえさせることを目的に活用しました。ボール運動では、ゲーム・試合のイメージをもたせるために、単元の初めにゲームを行う様子の動画を見せました。ほかにも、単元の後半にモデルとなるよい動きと比較させる意図でも使用しています。

三木：江口先生と少し重なりますが、私も三つの観点でICTを活用しています。一つ目は動きのモデルの提示です。手本の動きを見て、その動きと自分の動きの共通点を探り、子どもたちが課題意識をもちやすくなるように意識しています。二つ目は、授業中のフィードバックです。自分の動きを把握できるようにするために、表現運動、器械運動、陸上運動のハードル走などで活用しました。特に表現運動では、自分のイメージと動きがかけ離れていることがよくあります。可視化することでそのことが理解しやすくなるので重宝しています。三つ目は、継続的な資料の共有です。以前であれば体育館に掲示物として貼っていた資料や、毎時の作戦ボードなどを、タブレット端末で全員に共有することにより、前時から本時までの学びの連続性をもつことができるようにしています。

※ [T-Navi Edu Vol.10] 掲載。光文書院のウェブサイトを確認できます。

## デジ体「ゲーム・ボール運動」の見どころ

白旗：視点を変えて、デジ体開発に携わってこられた鈴木先生と須甲先生に、「ゲーム・ボール運動」に限定してデジ体の機能や活用例を伺いたいと思います。



▲デジ体「ゲーム・ボール運動」のトップ画面

鈴木：私はソフトバレーボール、三角ベースボール、バスケットボール、ボール蹴りゲームの動画を監修しました。撮影した2015年時点では「一人一台端末」は夢のまた夢のような状況でしたが、ようやく時代が追いついてきて、全国の小学校で活用いただける環境が整ってきましたね。

技能面での個々の課題と解決法に関する動画は、近年ICT機器が普及したことで、より使われやすくなったと思います。子どもたち自身が個別にデジ体を活用することで、自分の課題を発見し、解決法を選択できます。先生方も子どもたちの課題を発見しやすくなり、助言しやすくなったと思います。須甲：2020年4月からデジ体に追加収録されたサッカーとフラッグフットボールの動画制作を監修しました。先ほどのお話にもありましたが、体育の授業におけるICT活用は、現在は個人の技能の上達のために活用される例が多いと思います。技術的なポイントが明確な場合、理想となる動きを

確認したり、撮影して自分の動きを把握したり、友達と比べたりといった部分でICTは活躍します。

手本動画以外の「デジ体ならではの」の特徴について、三つお話しします。一つ目は「**つまずき例**」と「**これで解決!**」。デジ体ではモデルとなる動きだけでなく、起こり得るつまずき例と、解決するための練習方法がセットで確認できます。**課題の発見と解決に大変有効な機能**で、先生にも子どもたちにも役立ちます。

二つ目は「**ゲームの紹介**」です。デジ体のゲーム・ボール運動では、種目ごとに**ゲームの実施方法**を動画で示しています。ルール、コート大きさ、カラーコーンを置く位置などの例を示し、実際にゲームをしている様子を動画で確認できます。初めて行うゲームは子どもたちがルールを把握する必要があります、慣れるのに時間がかかります。ゲームを始める前に子どもたちが「**ゲームの紹介**」の動画を確認すると、スムーズにゲームに入っていけますし、**慣れるまでの時間が短縮できる**と思います。もちろん、先生が指導を行う際の参考にもなるはずですが。



◀「ゲームの紹介」では、ルール紹介の後、実際にゲームをしている様子を確認できる。

三つ目は「**作戦の例**」です。例えばフラッグフットボールは、ゲーム・ボール運動の中でも特に作戦の立案と遂行が中核となる教材です。動きを示す矢印を書いた紙やホワイトボードだけでは示しづらかった「**ボールを隠すふりをする**」などの**具体的な動きや、作戦ごとのそれぞれの人の動き出しのタイミングが、動画だと直感的に伝わります**。

フラッグフットボールの「**作戦の例**」では、俯瞰図で全体の動きを示した後、個人の動きの解説が入る。



**鈴木**：ゲーム・ボール運動は型ごとにゲームのやり方が無数にあるからこそ、「共通して何を学ばせるか」に視点を置いて収録動画を考えました。他領域に比べ「この場面ではどうするか」といった戦術、状況判断の例の動画を多く収録しています。

また、**ゲームを発展させていく流れ**を大事にしました。デジ体のソフトバレーボールでは、キャッチバレーボールの3

回キャッチ、2回キャッチ、1回キャッチ、そしてキャッチなしの「**ゲームの紹介**」動画を別々に収録しています。ゲームの発展とともに、作戦のアレンジやバリエーションが増えたり変わったりするので、「つまずき例」と「これで解決!」の内容を増やしたり変えたりしています。



▲デジ体のソフトバレーボールには、さまざまなルール設定の動画が用意されている。

**デジ体を実際に使用してみる**

**白旗**：続いて、三木先生と江口先生に、デジ体を実際に授業で使用してみた際の感触を伺います。

**三木**：まず魅力だと感じたのは、**動画が端的に編集されていて、必要なものを選びやすい**ことです。デジ体は1分未満の短い動画から少し長めの動画までさまざまなバリエーションがあり、授業を組み立てる際に取り入れやすいです。短い動画は授業の隙間時間に見ることができ、子どもたちが**タブレット端末に長時間拘束されません**。

領域・種目を選択した後に、小見出しがたくさんあるのもよいです。日々の体育の授業で「何がわからないのかがわからない」子どももたくさんいるのですが、小見出しがあることで**自分自身の課題を見つけやすい構成**になっていると思います。集団授業で一人の教師が子ども全員に即時に助言をすることは不可能ですが、「今、先生からの助言が欲しい」と感じる子どもの手元にデジ体があれば、教師が近くにいる場面でも子どもが情報を得られます。不安な気持ちを軽減させ、学ぶ意欲を継続させる手段の一つになると思います。



▲動画を選ぶ画面では、小見出しが並んでいる。

**江口**：冒頭でも述べましたが、デジ体は**動きのイメージや身につけさせたい技能を共有**するのに大変有効でした。ペープサートで示したり、目の前で実際に動いて見せたりしても伝わりづらい部分が、うまく伝わります。

**三木**：そう思います。この子ならできるだろうなと思ってみんなの前でやっても、ちょっと違ってしまったりなど、子どもたちにイメージがうまく伝わらないことはよくありますから。

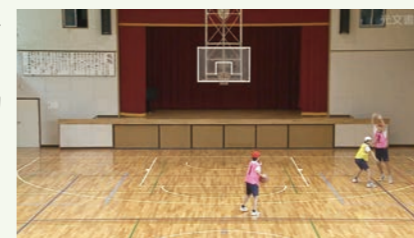
**江口**：子どもに限らず**教師間でのイメージの共有**にも役立ちました。私はサッカー経験があり、ほかの教師にサッカーの動きについて説明する機会があったのですが、サッカー経験がない相手に「**ボールを持っていないときの動き**」を伝えるのは苦労していました。

**白旗**：動画でまずは教師が動きを理解することが重要です。そうすると子どもにも伝えやすくなりますね。ほかに、デジ体の動画の具体的な内容について、感じたことはありますか。

**三木**：「つまずき例」は体育における「あるある」が詰まっていて、**子どもの困りごとに寄り添っている**と感じました。バスケットボールでは「**マークにしっかりつかれて、パスがもらえない**」というつまずき例の動画で、パスを出す人の目線の高さの角度と、斜め上からコートを見下ろした角度の、視点を変えた二つの動画が確認できます。客観的にコートを見下ろす角度などは、ふだん子どもたちが得にくい情報なので、子どもたちの参考になるのはもちろんのこと、教師が授業をするうえでも参考になります。



▲▶「マークにつかれて、パスがもらえない」を選択すると、二つの角度の動画が連続して流れる。



**江口**：今、話に出たつまずき例は収録動画の中でも「ゲームの中でかなり出てくる動きだ」と感じまして、ちょうど今日、「**マークにしっかりつかれて、パスがもらえない**」という課題が子どもたちから出たときに、「つまずき例」と、「横に動いてパスをもらう」「**空きスペースに動いてパスをもらう**」という「**これで解決!**」を確認してからゲームを

しました。すると、反対側に一度動いてから回りこんでパスをもらう動きが、子どもたちから実際に何度も出てきました。フェイントをかけたり、空きスペースに動いたりするような動きは、**競技経験が少ない子どもにとってはイメージするのが難しい**ところなので、このような動画はかなり使えると思います。

**三木**：「**ゲームの紹介**」は、「**ゲームの最終的な形**」が**イメージしやすい**ので、インストラクションやマネジメントの時間が軽減できてよかったです。子どもたちにゲームのやり方を説明しても、私自身が考えていたことをつかみにくい子どももいるからです。

**江口**：子どもたちがゲームに慣れるのに時間がかかるというのは私も日々感じています。最初の1時間の授業で2試合したとしても、ゲームの全体像がつかみきれず、自分の課題が発見できない子どもは出てきます。デジ体の「**ゲームの紹介**」を子どもたちに見せてからゲームを行ったら、全体的に**慣れるまでの時間が短縮**できました。

**三木**：「**作戦の例**」の動画もよかったです。実際に動くのが苦手な子どもであっても活躍できる場面の一つに作戦立案があり、その手立てになります。

**江口**：デジ体を活用すると**運動が得意な子どもと苦手な子どもの交流が活発になる**ように感じました。動画で何度でも確認できることで、苦手な子どもは発言しやすくなり、得意な子どもは伝えやすくなるのかと思います。

あとは今後撮影機能を活用していこうと思います。私自身これまで、あまりゲームの撮影をしていませんでした。子どもたちが見返したときに、自分で課題を発見するのが難しいと感じていたからです。デジ体のよい動きの例とつまずき例の両方を活用すれば、子どもたちが自身の動きと比較して、実際にゲームの中でそれらの動きが現れているかを確認できます。今後はゲーム撮影の効果が高められそうだと感じています。

デジ体の撮影機能は**時間ごとに自動でフォルダが分かれ、タグ付けできる機能**が便利です。単元の前半・中盤・後半と撮り溜めていくことで、子どもたちの変容を教師が見取れますし、子どもたち自身も単元の後半に見返すことで、より学習が深まると感じています。

**デジ体を効果的に活用するために**

**白旗**：先生方としては、つまずきに対してどのような対応をしたらよいかは大きな問題です。その対処法がわかるコンテンツについて評価をもらいました。作成者側から使い方について、ほかに提案はありますか。

**須甲**：デジ体を子どもの端末に入れて、動画を見てくることを宿題にする**反転学習として使える**と思います。大仰に考える必要はなく、子どもたちが家庭で3分の「**ゲームの**

紹介」を見てくるだけでもよいです。クラス全員が動画を見てこなかったとしても、見てきた子どもがいるだけで、ゲームも授業自体も進めやすくなると思います。実際は端末を持ち帰れない自治体も多いのですが、そうであれば朝の会や給食の時間に**ちょっと見るだけでも効果はある**と思います。

明日の体育のためにサッカーの動画を見ておこう！



**鈴木**：端末の持ち帰りが可能な品川区のとある小学校で校内研究に関わっているのですが、子どもが自分の体育の授業の様子を撮影した映像を家で見返すことがあるようです。保護者からも実際の授業での子どもの様子を見ることができてよかった、という話が上がっていました。こういった**家庭との情報共有**にも使えますよね。

**白旗**：体育について保護者に関心をもってもらうためにも、家庭での使用というのは重要な視点だと思っています。

**江口**：私は今後、デジ体を**単元のどの段階でどういう使い方をすればよいか**を具体的に考えていきたいです。授業でデジ体を使用すると、子どもたちから「実際にやってみてもいいですか」という声のすぐ上がりました。デジ体を使っていなかったときと比べて、子どもたちから声の上がり始めるのが早い気がしましたし、それが意欲につながっているなら、休み時間や放課後に自主的に取り組もうとする動きも出てきます。そのあたりは、今後も研究していきたいです。そのうえで、教員間で活用法を共有できている状態を目指せたらと思っています。クラス間格差が縮まり、子どもたちの学びが深まっていくことにつながります。

**須甲**：デジ体は現時点で動画が大量に収録されていますが、使うタイミングを指示する補助機能はありません。体育指導が苦手、かつ身近に体育指導が得意な先生がいない先生方は、いつどれを使えばよいかわからないと思うので、そこはカバーしていきたいですね。

**白旗**：教師目線で、どう授業を進めていけばよいかを示す機能や動画は増やしていきたいですね。

### 今後のデジ体やICTへの期待感

**白旗**：課題や今後の話が出ました。最後にデジ体やICTに対する期待や、将来的な希望などの話を伺っていきます。

**須甲**：たとえば今日の話に出た「マークの外し方」は、相手

やコート状況によって、全く違う動きや技術が必要になることがあります。繰り返しになりますが、**教師がどの動画を、いつ使うか**は、今後も研究の余地がありますし、デジ体側の課題でもありますね。あとは試合中に試合に出ていない子どもへの対応、ローテーションの方法といった情報も提供していけたらと思います。体育指導の苦手な先生からは、そのあたりがうまくいかないという話も聞くので。**江口**：単元を通しての**子どもの伸びや変容を教師側が把握できて、子どもに具体的にフィードバックができる機能**がデジ体に搭載されるとよいと思います。ボール運動領域はどうしても、子どもたちが勝ち負けを意識しすぎて、勝てば満足、負ければ不満になりやすいです。子どもたちが自身の成長や変容に達成感を得やすくなるのがICTで実現できたら理想的だなと思います。

**鈴木**：今後は、デジ体側からの発問があって、それについてどう考えるかといった使い方や、体育の授業における「工夫の仕方」といった**思考力・判断力・表現力の育成や評価を補助する機能**もできていくとよいですね。体育にICTが有効なのは間違いないと思いますが、今後「体育だからこそICT」となっていくとよいですね。

**三木**：私はICTが**文房具的な位置づけ**になっていくとよいと思います。勤務校では、朝の活動時間に補充学習的な時間が設定されています。そういう時間にさらっと見て、授業に備えるという使い方が当たり前になってほしいです。インフラ整備の問題はまだありますが、個別最適な学びとしても、コミュニケーションツールとしてもICTは有効だと思いますので、どんどん広まってほしいですし、活用法を研究していきたいです。

**鈴木**：目的ではなく手段として、というのはよく言われますし、その通りなのですが、まだ活用できていない先生の方が多くという現状もあります。現時点では「**とにかくICTを使って体育をしてみよう!**」というのもありだと思います。実際に使ってみないとわからないことがありますし、そうやって使う先生が増えていくと、使っていなかった先生方にもより広まっていくと思います。

**白旗**：授業は45分しかありません。合理的で質の高い授業を行うために、ICTが得意な部分はICTが担当する、という流れが加速するとよいですね。私は、教師が自分の行った授業の主体的な改善のために、ICTの活用が進んでいけばよいと思います。

本日は4名の先生方に、それぞれの立場と経験から、デジ体およびICTの使い方や、課題、将来への展望をお話いただきました。今後、世の中はすごいスピードで変化していくでしょうし、それに伴ったICT、デジ体の機能や使い方を提供していけたらと思います。

※本座談会は、2021年12月上旬にリモート収録で行いました。

## 寄稿

小学生のうちから!

# 生活習慣病 予防指導の考え方



太田 充胤

Twitter

@Mitsutane\_Ota

内科医／内分泌代謝科医として勤務する傍ら、批評家として執筆活動を行う。フィルムアート社「かみのたね」で身体論「踊るのは新しい体」を連載中。過去の掲載媒体に医学書院『看護教育』、講談社「現代ビジネス」など。

### 1. 「生活習慣病」概念の由来と意図

生活習慣病は「食習慣、運動習慣、休養、喫煙、飲酒等の生活習慣が、その発症・進行に関与する疾患群」と定義されています。具体的な疾患として、脳卒中、がん、心臓病のいわゆる3大成人病に加えて、糖尿病、高血圧症、脂質異常症、高尿酸血症、肥満症、肺気腫……などなど、自覚症状は出ないものの大きな疾病につながるような病態が含まれています。

この「生活習慣病」という概念、日本で導入されたのは、実は1996年と比較的最近のことです。その由来や意図をご存じでしょうか。

それまでの健康政策では、成人病というコンセプトに基づき、病気が加齢とともに増えるものであること、早期発見・早期治療が重要であることが強調されてきました。これらの知識が国民の間で定着することによって、成人病対策は一定の効果を上げてきました。

成人病対策の効果が頭打ちになったところで、次に課題となったのは成人病の発症原因へのアプローチでした。病気を発症してから早期発見・治療するコンセプトから、発症すること自体をなるべく予防したり遅らせたりするコンセプトへと、舵を切ることが求められたのです。

さて、成人病の発症には、遺伝素因、環境要因、生活習慣など多数の因子が関与していることがわかっています。しかし実際には、これらの要素のうち国民が自ら管理し予防に努めることができるのは生活習慣だけ。そこで導入された概念が「生活習慣病」でした。

導入から二十余年、かつて3大成人病と呼ばれた病気がある程度は予防可能なものであること、疾病予防のために生活習慣改善が重要であることは、おおむね人口に膾炙しているかと思えます。

### 2. 初等教育における生活習慣指導

周知の通り、疾病予防において重要な生活習慣としては、食事、運動、体重管理、嗜好品などが挙げられます。喫煙や飲酒などの嗜好品はさておき、食事や運動などの生活習慣は、小児期にその基本が形成されるといわれており、初等教育において「生活習慣病」という概念を学習することの意義は非常に大きいと考えられます。



▲食事や運動などの生活習慣は小児期に基本が形成される。

私自身は普段、成人の生活習慣病診療をしています。小児期に獲得した食の嗜好を大人になってから修正することの難しさを日々実感しています。

患者さんにお話を伺っていると、清涼飲料水を飲んだりスナック菓子を食べたりする習慣がある人と、全くない人とは明確に分かれます。よくよく聞くと、こうした習慣のある方は小児期や思春期に習慣を形成し、そのまま今に至っているケースが多いように感じます。

また、料理する習慣を身につけないうち大人になってしまい自炊ができない方が、ファストフードやコンビニ弁当、スーパーの惣菜に頼りきりの生活になってしまうケースが多々あります（現状では圧倒的に男性に多いです）。残念ながら、外食・買食のみで十全な食事療法・生活習慣病予防を行うことは難しいのが現状です。のみならず、学童期に食育の機会に恵まれなかった方の場合、そんなジャンキーな食生活が続いてもあまり不満を感じていなかったり、むしろファストフードを「食べたい」という気

持ちを強く持っていたりすることもあります。こうしたケースでは、患者さんの側には生活習慣を改善する手段もなければ動機もないわけで、治療にはかなり難渋します。

余談ですが、料理習慣がない人が結婚したり、実家に帰ったり、単身赴任を終えたりすることで糖尿病などが劇的に改善するケースはよく経験します。家庭内に料理担当者がいるかどうかは、疾病と大きく関係しています。生活習慣病予防においては保健、家庭科などの各教科や学校給食での食育指導が重要だと感じます。

運動についても、小児期の経験がかなり尾を引く印象があります。小児期に抱いた運動への苦手意識——たとえば「冬のマラソン嫌だったな……」のような——が、大人になってからもなお「運動」という言葉への抵抗感につながっているケースが少なくありません。運動しないといけないことはわかっている、でも運動は「辛くて苦しいもの」だからなかなか取り組む気になれない。少なからぬ患者さんがそんな感覚を抱えています。特にスポーツの時代に育った方などは、運動といえば本格的なスポーツやストイックな部活のことをイメージされるようです。

実は生活習慣病の予防・治療としての運動療法は、それほどハードなものでもなく効果があるのです。運動に抵抗のある患者さんでも、スロースクワットや壁腕立て伏せのような簡単な筋トレをご紹介して運動の効果を実感していただくと、その後は楽しんで取り組んでもらえることが多いように感じます。

体を動かさない娯楽が増えている現代ですが、スポーツの得意・不得意にかかわらず、多くの子どもたちが体を動かすことの楽しさや効果を実感できるよう、ご指導いただけることを願っております。

### 3. 「生活習慣病」というスティグマ

注意していただきたいのは、「生活習慣病」は生活習慣管理で必ず予防できるものではないという点です。

ここまでの話と矛盾しているように感じられるかもしれませんが、冒頭に述べたとおり、「生活習慣病」には生活習慣だけでなく、遺伝や環境など多因子が関わっています。したがって、乱れた生活でも発症せずにいる人もいれば、普通に生活していても発症しやすい人もいます。

特に若年者の場合には、多くの場合なんらかの遺伝素因があります。たとえば若年で糖尿病を発症した患者さんで、血縁にだれも糖尿病がない場合には、まず1型糖尿病(生活習慣とは無関係に発症する特殊な糖尿病)や二次性糖尿病(ホルモンの病気などを背景として二次的に発症した糖尿病)の可能性を考えます。

「生活習慣病」という名前ゆえ、今日では様々な病気

が自己管理の問題、本人の責任だと見なされがちです。しかし、生活習慣だけが原因ではないのだということも、よくご承知おきいただきたいと思います。

「生活習慣病」に対する社会的な偏見から、患者さんが社会活動を制限されたり、健康行動や受療行動を控えざるを得なくなったりすることもあります。こうした偏見は「スティグマ(烙印)」と呼ばれ、近年ようやく問題視されるようになってきました。日本糖尿病学会では2020年から「アドボカシー活動」と銘打って患者さんの権利擁護活動を行っています。



▲糖尿病のアドボカシー活動に関するリーフレット

初等教育においては、病気を予防することの重要性を学んでもらうのと同時に、病気は自己管理と関係なく発症すること、社会がそれを差別的に扱うべきではないことも知ってもらえたらうれしく思います。また、すでに何らかの生活習慣病を発症している場合でも、良好に管理されてさえいれば日常生活や学校行事への参加を制限されることはないという点も重要です。

### 先生方へのメッセージ

何年前か、重症糖尿病で入院された30代前半の小学校の先生を受け持ったことがあります。まさか自分が、しかもこんなに若くしてなるとは思わなかったと驚いていたのが印象的でした。また、日々の業務が忙しすぎて自分の体に気を遣う暇がなかったとも仰っていました。

生活習慣病は早い方だと10代で顕在化します。30歳前後で発症するケースは珍しいことではありません。ご多忙とは思いますが、健康診断はぜひ受診していただき、結果が届いたらきちんと封を開けて、中を確認してみてくださいね。



EdLog クリップ採点支援システム™

ひまわりエディション

立命館小学校

## 独占インタビュー

採点支援システムEdLog(エドログ)を導入！  
グローバル人材の育成に力を入れる立命館小学校に聞く、  
その経緯と効果とは？

ひまわり  
エディションの  
機能詳細は  
こちら！



株式会社光文書院と株式会社EdLog(エドログ)がサービスを提供する採点システム「EdLogクリップ採点支援システム ひまわりエディション」(以下、EdLog)。光文書院の単元テストを採択すると利用いただける無料の採点システムで、スキャンしたテストデータを小設問ごとに一覧表示することでスピーディーな採点を可能にし、先生方の校務負担削減にもつながる便利なツールです。

今回は、本サービスをご利用いただいている立命館小学校にお伺いし、学校の教育目標をはじめ、それに伴うEdLog導入の経緯などについて、校長の堀江先生、ICTご担当の正頭先生、山田先生にお話を聞きました。

### 理想の学校像の実現に向けて、 採点システムの導入で時間を創出

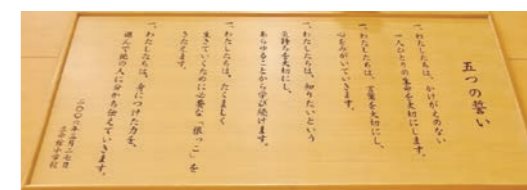
まずお話を聞いたのは、2021年度から専属で立命館小学校の校長に着任された堀江先生です。これまで小学校だけでなく、立命館学園の中学校・高等学校、大学など、子どもたちの成長にさまざまな立場から携わられてきた堀江先生に、教育目標の存在と、EdLog導入の経緯について質問しました。

—— 小学校の教育目標を教えてください。

堀江先生：前提として、立命館は「立命館で学んだ子どもたちが、その学びを活かしてリーダーシップを発揮し、自分の生きていく世界を変えていける人間になりましょう」というメッセージを掲げています。そこで、中学校、高等学校、大学も含めて長い目で子どもの成長を見てきた、私自身の経験も踏まえつつ、2021年度からの小学校の学校経営方針を定めています。

具体的には、どんな子どもを育てていきたいか、育成人材像という形で、

- ①「五つの誓い」を体現する子ども
  - ②自律的な学習者・生活者としての自分に肯定感を持ち、自分の成長に期待と希望を抱く子ども
  - ③グローバルな視野での人権と社会貢献に対する高い意識を持ち、利他の心を自生する子ども
- の3つを挙げています。



▲五つの誓い

立命館が掲げるグローバルな社会貢献意識はもちろん、学習者としてだけでなく、これから生きていく人間としての自分への自信や、小学校6年間の後も続く、自分の成長への期待をきちんともってもらいたいという思いを込めました。

また、理想の学校像として掲げているのは、

- 子ども、保護者、教職員が、信頼関係の中で共に学び合い成長し合える学校
- それぞれの子どもの成長のあり方を肯定し、長い目で見守ることができる学校
- 挑戦を応援し、失敗から学ぶ経験を大切に学校の3つです。

基礎学力をしっかり身につけることは大前提ですが、そのうえでそれぞれが失敗してもよいからやりたい学びにチャレンジしていく経験を大事にしましょうということを、2021年度は特に強調して取り組んでいます。



▲校長の堀江先生

—— こういった目標がある中で、EdLogを導入されたのはどういった経緯があったのでしょうか。

**堀江先生**：学園や小学校として目指している子どもたちの姿や学校の姿に、どうしたら近づけるかという、まず、近づくための取り組みを進める時間を作り出すことが必要です。やはり先生方にとっていちばん大事な仕事は子どもと向き合う時間ですので、そこをどれだけ大事にできるか、創出できるかが重要なポイントになってきます。その時間をつくるために、働き方改革含め、優先順位を付けたうえで、無駄なものは省き、機械に任せられるものは任せていきたいと思います。そのような流れの中で、EdLogも、よりよい学校の姿を目指すための時間をつくる一つの手段として導入しました。



▲ EdLog導入の目的は、子どもたちと向き合う時間の創出

単元テストで培った知識を探究的な学びへ。削減した時間で何をすることがモチベーションに

続いては、立命館小学校でICT科をご担当され、単元テストやEdlogの導入・活用を進めていらっしゃる正頭先生にお話を聞きました。

—— 立命館小学校におけるテストの位置づけや、単元テスト導入の経緯について教えてください。

**正頭先生**：僕らの中では、学習には「インプット（知識を得る）→インテイク（定着させる）→アウトプット（活用する）」の3段階のプロセスがあるととらえています。

2019年度までは、単元テストから中間・期末テストまで全て先生の自作で実施していました。しかし、働き方改革の観点で見たときに、テストは厳密・厳正でなければならず、先生が自作するのはとても負担であるという議論が出ました。今までのインテイクの確認の場だけで十分なのか、本当はその先のアウトプットが大事ではな

いのか、という話もありました。

そこで、1回あたりのテストのボリューム感を軽くし回数を増やしつつも、先生方の負担は軽減できるように、ということで、採点システムを提供しているEdLog社のサービスと連携している光文書院のテストを採択することになりました。

EdLogを活用することで時間が短縮できるわけなのですが、「ではその浮いた時間で何をしようか」という視点で、先生方自身をモチベートできるかも大事だと思っています。EdLogのような採点システムに限らず、学校で新たなICT教材などを導入しようとしている先生の中には、他の先生からの反応が芳しくなく、苦勞されている方もいらっしゃると思います。そういった場合には、その導入によって空く時間で、何ができるようになるかまで併せてお伝えしてみるのも一つの方法かもしれません。

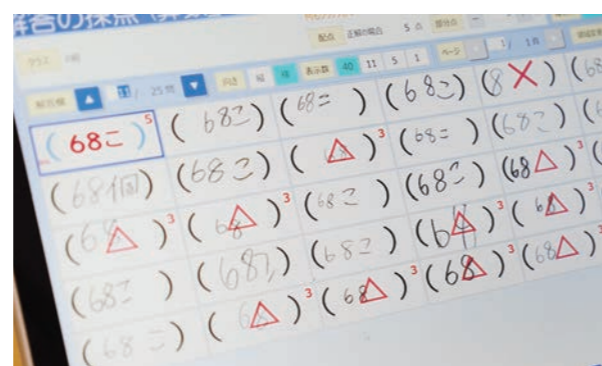


▲ ICT科担当の正頭先生

—— 採点システムを使うことで、児童の見取り方に変化はありましたか。

**正頭先生**：丸つけをする際に各児童の名前を非表示にできるため、余計なバイアス（先入観）がかなり取り除かれます。例えば名前が見えていて、普段は満点のAさんにバツがついたとき、本当？と気になって止まって問題を細かく見て無駄な時間を使ってしまったり、最近勉強をがんばっているBくんのテスト用紙を先に探して丸つけてみたり…。でもバラつきのない効率的な採点のためには、そういう作業は最後にまとめてすることにして、丸つけは止まらずに済ませるとするのがポイントだと思っています。

ですので、システムを使うことで子どもの名前を見えないようにできるのはよいですね。また、EdLogは最後に



▲ EdLogの実際の採点画面。子どもの名前を載せないことで先入観が除かれ、効率化につながる。

正答率を出してくれるので、分析に時間を割くことができます。

空いた時間は授業準備や子どもの見取りに活用。システム浸透へのさらなる期待

最後に、正頭先生と同じくICTを担当されている山田先生にも、普段どのようにEdLogを活用されているか、使用感や今後の展望について教えていただきました。

—— 単元テストと採点システムEdLogをご利用いただいてみて、いかがでしょうか。

**山田先生**：1年生は全体的な問題数が少ないのでEdLogは使っていないのですが、各学年の担任はある程度使える状況なので、テストの採点にはEdLogを使うというのが浸透しつつあります。先日は分散採点（丸つけの作業を複数人で分担できる機能）を初めて使ってみました。感動しました。あれは本当に早いです。



▲ EdLogで採点をする様子

EdLogの導入によって、テストの採点は15～20分で終わるようになったので、テストを実施したその日のうちに十分に終わらせられます。しかも、転記もしなくてよいですね。以前公立の小学校で勤務していた際は、テストの実施から返却までに数日空いてしまう日もあり、転記にいちばん時間がかかっていました。

でも今では点数が間違いないかの確認も一切いらないうですし、データのバックアップもできるのでありがたいです。子どもにとって、テストがいつ返されるかというのは、一つのモチベーションになるので、実施から返却まで待たせることがなくなったのもよかったと思っています。

僕自身も、放課後に教材準備や授業準備をしたり、休み時間に子どもの様子をしっかりと見取れたり、子どもに声掛けできる素材を探しに行ったり、と空いた時間をか

なり活用して、時間をうまく使い分けることができるようになりました。

—— 今後の展望や計画している新しい使い方などがありましたら、教えてください。

**山田先生**：働き方改革の一環として、他の先生に採点をしてもらうことになった場合、採点基準さえ一律にしておけば、分散採点機能を使って負担なく一気に済ませてもらえることが可能だと思うので、そのような使い方も学校全体に提案していけるかなと思っています。もちろん、担任の先生が実際に採点したいという気持ちも理解はできるのですが、協力しながら互いに効果がより発揮できる方法で使っていきたいです。

また、手で丸つけをした方が早いという感覚もあると思うので、そこをどう採点システムの方へシフトしていかれるかも考えていきたいです。1日の中のどのタイミングでスキャンするかというような、具体的な時間の使い方までは浸透させられなかったため、休み時間に1クラスずつスキャンしておくなど、他の先生方の使用具合を聞きながら相談・提案していきたいと思っています。



▲ ICT教育部長の山田先生

## まとめ



校務負担の削減は、EdLogの大きな魅力の一つですが、「空く時間で何を成し遂げたか」、学校の先生方間で認識を合わせておくことで、採点システムの導入にもより意味が出てくるのだと思います。

取材にご協力いただいた先生方、誠にありがとうございました！

本誌に載せきれなかったインタビュー内容はWebに掲載中です！▶▶▶





光文書院からの  
お知らせ

子どもの自己学習能力が身につく

# 光文書院のデジタルドリル 「ドリルプラネット」の実証研究実施！

“PIXARドリルシリーズ”の  
デジタルドリル、始まる。



光文書院のデジタルドリル

## ドリルプラネット

小学校現場でのタブレット等のICT端末の普及に伴い、これからの時代の宿題の概念を変えるべく、弊社では、2022年9月から年度末にかけてデジタルドリル教材「ドリルプラネット」実証研究のためのご提供を予定しています。

ご参加いただける学校様は、2022年度新学期より募集する予定です。  
本誌では「ドリルプラネット」の3つの特長をご紹介します！

～2022年度新学期受付開始！～

2022年度2学期～  
「デジタルドリルの実証研究」実施

詳しい情報は  
こちらから！



## 「ドリルプラネット」3つの特長

これまで使ってきた  
紙のドリルとの  
使用感を比べて  
みようかな！



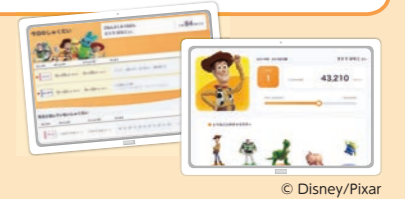
### 特長① 自己学習能力が身につく機能と、シンプルで分かりやすい導線

小学校現場の学習サイクルにあわせて、宿題配信～確認までの導線をシンプルに設計。漢字の書き順や計算の解き方を動画アニメーションで学ぶ「きほん」、漢字の書き取りや計算問題を練習しながら学ぶ「れんしゅう」、学んだことの理解度を確かめながら学ぶ「たしかめ」、最後に学んだことの腕試しができる「テスト」と、**学び方に合わせた機能を搭載**しています。



### 特長② 「トイ・ストーリー」のキャラクターによる、児童の学びを楽しくするサポート

図書教材でも馴染みの『トイ・ストーリー』の仲間たちが学びのモチベーションアップをサポート。学習ポイントに応じて現れる多彩なキャラクターやスタンプが、一人で取り組む宿題シーンでも児童に寄り添い、**学びを楽しくサポート**します。



### 特長③ 先生が手軽に選べる、お求めやすい納得の価格設定 ※価格は2023年度からの税込み価格です。

従来の図書教材と同様に小学校の先生が自ら選べるよう、お支払いいただく保護者の方々にもご納得いただける価格設定になっております。

また、図書教材と同じく販売代理店経由でのご採択が可能です。

紙のドリル

ドリルプラネット

1か月あたり150円で  
利用可能！

漢字と計算セットで  
年間 **1,800円**  
※国算セット販売のみ

漢字ドリルと計算ドリルで  
年間 **2,100円**

## T-Navi Edu Vol. 11 編集後記

T-Navi Edu Vol.11をお読みいただきありがとうございます。

今回の特集「学校現場とSDGs」はいかがだったでしょうか。今回、取材にご協力くださったイマコラボのお二人と、実践例を寄稿して下さった吉金先生が、ともに「子どもが自分ごととしてとらえられるように」という言葉を使われていたのがとても印象的でした。子どもたちだけでなく、今の社会をつくる大人の一人として、私自身もSDGsを自分ごととしてしっかり考えたいと思います。

実は、前号のVol.10からメンバーが一新し、現在のT-Navi編集部はまだまだひよっこなのです。「この特集がおもしろかった」「あの先生のお話を聞いてみたい」などなど、感想・ご意見をお寄せいただけるととてもうれしいです。引き続き、先生方に有益な情報をお届けできるよう精進しますので、今後ともT-Navi Eduをよろしくお願いたします！ **下田**

取材・原稿作成にご協力いただいたみなさまに心より感謝申し上げます。  
次号 T-Navi Edu Vol.12は6月発行予定！ お楽しみに！

ご意見・ご感想は  
こちらから！



好評発売中!

# 光文書院のおすすめ書籍



## 道徳授業ハンドブック5

教材をどう読むか どう発問するか

- 教材の読み方や発問の工夫など、道徳授業を行ううえでのポイントを具体的に解説!
- 18の定番教材で、具体的に考えられる!

A5判/64p  
定価: 550円 (本体500円+税10%)  
著者: 新宮弘識  
ISBN: 978-4-7706-1130-7

Amazonでのご購入はこちら



「道徳授業ハンドブック2・3・4」大好評発売中!

※ハンドブック2・3は弊社販売店経由で、ハンドブック4・5は販売店に加えて書店やAmazonからもご購入いただけます。

算数×学級経営  
魔法の言葉で  
もう一歩先の授業・クラスを!



- 全学年対応の魔法の言葉20で学級経営をレベルアップ!

B5判/112p  
定価: 1650円  
(本体1500円+税10%)  
著者: 高橋丈夫 青山尚司  
榎原裕仁 工藤尊大  
小宮山洋

Amazonでのご購入はこちら



伝説の算数教科書  
『尋常小学算術』で  
深い学びの授業づくり



- 『尋常小学算術』(通称『緑表紙』)を使った授業アレンジ例を全20事例収録!

B5判/160p  
定価: 1650円  
(本体1500円+税10%)  
編著: 鈴木純  
著: 未来につなぐ算数研究会

Amazonでのご購入はこちら



プレ漢字ワーク  
(1~4年)



- 漢字の読み書きが苦手な子どもにも! 楽しみながら漢字を学べるアイデアが満載!
- コピーフリーで何度でも使える!

B5判/右開き  
1年216p 2年256p  
3・4年320p  
定価: 1・2年 1760円  
(本体1600円+税10%)  
3・4年 1980円  
(本体1800円+税10%)

Amazonでのご購入はこちら



監修: 小池敏英

🛒 ご注文は、光文書院販売店、または書店、AmazonWebサイトにて

先生方へ

光文書院より  
目より情報!

## 光文Webサイト コラム掲載記事のご紹介

Webサイトにて、コラム形式で教育情報をお届けしてまいります!!

『覚えておきたいExcel活用術 ~通知表編~』

テストの点数から成績を算出したい...など、通知表作成時に使えるExcelの活用術をご紹介します!

コラムはこちら

